我が家の介護　最終章

光英 VERITAS 中学校　二年　田端　美海

永遠の別れじゃないはずなのに、なぜ涙が出るの？何年も何年も待ちわびた今日がやっと来たのに、なぜ悲しいの？曾祖母を介護施設に預ける日の朝、母は泣いていた。

自分の歳を二百歳だという私の曾祖母は、大正生まれの九十八歳。健康診断の結果は、内臓百点。認知システム故障中。

今から十二年前。風邪をこじらせたことがきっかけで、高齢である曾祖父母の二人暮らしに限界を感じた祖母が、自分の両親を看るべく住み込み介護が始まった。迎えに来たデイサービスの車に、「今日は行かない！」と大声で駄々をこねることしばしば。介護の合間に私のワンピースを作ることが唯一の楽しみだと嬉しそうに話す祖母を横目に、「針仕事ばかりして！」とピシャリと一撃を放つ。認知症という病気が強い言葉を呼び起こしているのだとわかっていても、攻撃的な言葉一つ一つが、祖母の心に深い傷を重ねていった。

介護生活から七年。九十七歳で曾祖父が他界した。遺された二人のちぐはぐな暮らしは続く。ある深夜のこと。階下に聞こえる話し声で祖母は階段を降りた。玄関には三人の警察官。「気をつけてね！」と帰っていく後ろ姿に手を振って、何事もなかったかのように床に就く。九十六歳、真夜中の大冒険は、徘徊を意味した。

更に時は進み、認知症の進行、生活機能の衰えが目立ってきた。誤飲で目が離せなくなり、排泄の後始末で洗濯機はフル回転。介護生活十二年。祖母自身も七十三歳になった。老々介護の限界。施設に預ける決断をしたのは、要介護５の認定を受けた頃だった。

日本の高齢化社会、施設に預ける順番待ちは、無情にも長い。待ちに待った入居の電話。介護のゴールに家族皆が安堵したと同時に、少しの寂しさが入り交じった。同居していたわけではないし、私が介護をしていたわけでもない。私を曾孫だということさえわからないし、名前を呼んでくれることもない。それでも、家族と離れて暮らすという現実が迫った時、心がしぼんでいくのを感じた。二人で過ごす最後の晩、二人は泣いた。住み慣れたこの家には二度と戻らないこともわからないまま、翌朝、家族の元から離れていった。

私はこれまで、少し離れた立場から介護を見守った。目まぐるしく変化していく日常や、

突拍子もない出来事に一喜一憂しながら、介護に向き合う時間を過ごした。高齢化社会、これから直面する家庭が増えるであろう介護について私は声を上げる。大切だと思うのは、介護者の心身を注意深くケアすること。介護疲れで、メンタルが不安定になる例は数多い。介護に全てを注ぎ込まず、多くの人の手を借りて、自身の人生にも時間を使えるサポートが広く浸透していくことを望む。又、まともな会話も成り立たない、日常の孤独感に寄り添い、介護者の話しに耳を傾ける事も大切だ。良かれと思って発する助言や知識の強要は、時にストレスを与えかねない。同調や肯定の言葉、単純な相づちが支えになることもある。

昨今、ヤングケアラーという言葉を耳にするようになった。ヤングケアラーとは、家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポート等を行っている十八歳未満の子供のことだ。私と同じ中学二年生の約十七人に一人がヤングケアラーである。行政の支援はまだまだ行き届いておらず、近年着目されている社会問題の一つだ。学業、進学、就職面の支障や、友人関係、社会的孤立等、様々な影響を及ぼしている。子供が子供らしい生活を送れるよう、介護問題と併せて、支援が必要だ。

今日は暑い。お風呂に入れてもらったかなあ？外にきれいな紫陽花が咲いているよ。ふとした瞬間に想いを馳せる。パズルのピースが一つ欠けていても、家族を想う気持ちはずっと変わらない。いつか家族の記憶を失っても…。